平將門退治圖會 五

ヘ 13
3296
5

平将門退治圖會 四

起天慶三年二月
至同年三月

第十三 廣島山合戰将门勝利
附 同所没落辛島合戰

古語に曰く。金を市に攫ものは。欲心勝てその善悪する処あるを知らずと。聞に
利を求むる者は。利心専らにしてその禍患を顧ずと。宜なるかな。平将门が悪逆偏
に身に顧みるべし。身の栄曜と悪事の風説とを宇宙に専らにせんとて壊ぞその
壊し忽地に至るをしらずや。是智勇備り有て。仁義忠孝の心なきが故の三綱
まづ往古より身の分限を量らず。欲心熾盛にして栄曜を極めし人の旅我
朝家を傾けんと討ち。或ひは国家を簒奪せんと欲するもの。上代護我の馬子
入鹿の父子を始めとして康継の類ひ。下として上を凌ぐ。その罪強重なり。

大正十年八月廿九日 本大學出版部寄贈

門 へ 13 號 3296 巻 5

或ひハ同根連枝のあひ中まで國家を奪ハん為ニ謀叛を企て帝ニ害を及さんとせ
りて溝瀆野径ニ餓死せしめ戸ハ郊原一堆の塊と化せず。活を千載ニ朽ち
ざるし。九族計智界ニ及び衆を聚め党類を催し國家を動乱せしめ朝敵
と呼るるもの。古来今従数個ぞ。さるを是ハ兇悪の人ニあらずと思ひ又人懐
けず。人ニ懐かざれバ文武を全うべからんぞ。然りとも唯一人ぞある。素懐を遂し志を履ば
再説貞盛秀郷の両将ハ是ハ十二月のまで東雲ニ鎮の兵を進め押寄る
ニ。将門が陣中静りかへつて時の声を合せれど人を更らして動静を伺ふて見れ
ハ人一人もなく。剣を拼て鴨の廣小の補給ねと聞えしかバ。さらバ要害をせぬさえニ斤
時も程なく逃げよとぞ。平三兼任及田原千晴ニ一万余騎ハ閉て礒橋より折
寄させ。両将ハ三万余騎引き添ひ搦手より攻まれど、ニ両日の末の朝より。
鴨の廣山へ押寄せて。時のまで二度揚させ。鏑矢をもつて射かける。然ずの懐中の寂寞を

虎。雷の矢ども射返さんずバ昨日の軍ニ懲らるなと。早り雄の若者ども馬ニ駕
堀際へ乗つけて。鞭で馬を乗放し。逆茂木を引退櫓楯一重ひた破りて櫓の
下まで責寄せ。塀ニ鉄を引かけて散入んと突く所を城中より思ひ図ニ引
寄て。乾の方の出屏より大石五六十投懸けれバ寄せ手ハ是ニ碎けて漂ふ
所で十方の高櫓より雨霰と鏃を揃へて射出せ矢ニ真先ニ進む五百騎
人数ハ射立られて。狼狽を仕けて引退く。元来この城の要害ハ将門が平生
ニ工夫して。構えたる城なれバ塗堀横堀より櫓のかまり古今無双の名城なれ。
殊ニ六万余騎が籠りしなれバ。たとへ何十万の勢をもつて責るとも輙ハ落べく
も見えざりけり。然ども多年恩顧の郎等ら命を羽毛の軽きニ比し。覚て戦場ニ
曝してこそ君の恩ニ報んとす。金鉄の兵士なれバ射れども実ども落すべくもあらず。
この責ばで一旦も去ず喚き叫んで責たれども城中もまた屈せず防ぎ戦ふ

殺けて防ぐやどに黄昏に及ぶまで勝負つかず決せざりしが寄手の方にて十里の道を揉に揉て駆来り直に責かゝるに流石の軍勢疲労して暫く息て休めんと陣を取て馬の鞍を下し。或は鎧の上帯解てその疲を休む折柄将門昨夜まどろまざりしかば九千餘騎の兵時分いまだ寝ぬ時を吐と俄に。思ひもよらぬ横合より喚き叫んで責かゝれば寄手の兵いとまを駆き周章狼狽大急にして防ぐべき備へもなかりしかの様をうん澄して。逆兵勝て二千餘騎懸中より発矢し。接を責てあるを討。寄手流石に猛しくとりこめて防ぎ戦ふ義勢多く。遠くに討ることなく。東西に走り南北に引退く。大将秀郷い声を揚て。嗟ひ甲斐なき者かな。とて防げ彼処をかこと。頼りに下知を傳へて。崩と立る癖者ども。ようく耳に聞入ぬ。猛に戦将推守興世い利兵堅て破り。堅甲利冑を推て四角八方に蒐通りて。責討るの急なるべき時方いかく敵を失て。

敵に小落ぬ。あの時急に近蒐あべき大将を拾とて。家使の人々も討るべきに。さのみ長く追ものせず。辛き命を拾りしかの。将神仏の加護やうけん。五十餘町引退き。高橋の兵一万斗りを。集めて陣を取小勢多。おの擬ふより向ひ。兼任千騎の軍勢い奈何めしくり討漏ぬ。十三日の子の刻ばかりに。鴻廣山の南に着き。そのうちに。世て大に戦魂し。まの使者を立て其意を伝あ将(代)。さて敵と思ひ合ふい。相圖のを。汝遅滞に。味方に不慮の敗を。蒙ることー。汝物其処に。奈何めもしてその怠りを償べい有べうべ。と。奥州上野の勢の内より。完竟の兵二百五十騎を撰て。岩付吉次を案内として。十三日の月に乗て。其処に。此処を巡見るに。鴻廣山の南の端い西の尾濤より。東の端まで。大なる沼ありて。翅なくして。越がたく。二百五十騎の兵ども。墓二束ばかりを。沼に張つめ。難く沼を。渡べ。新たりとれば。荊棘深く上に生茂り。

松柏森然として苔滑なるに登り行んと覚束なみれど。岩付吉次が石なれば。
聞者ありけるに前を掻分て本の根を攀り。稍〳〵に登り行べし。百五十騎の跡を
着。或い蔦蘿を取着或い先の人の草履を便とし。辛じてなを登り。堀の
際に来りて。程のやうを候に敵此所を寄べしとは思ひもよらぬに。是は術しな
き兵共なれば。吉次が熊を懸て。すかすと堀を乗越。僧の本
どを見きられば。一回の騒中へ押入て。此処彼処をうかゝひ。数箇度の戦に疲れ
る軍兵共に惟幕を張て。中宵を抱として。前後も知らぬ伏て居り。発動する
間の事の方角を渡て明んとすれば。諸方の寄手の人々迷分ぬ〳〵と頼て進ぬの
態を把出し。陣々取所を〳〵に火をかけるに。天明の見の頃と覚つるに。城中一回の
騒りなれば。警破疲討の入りとして。城兵一回の騒ぎなれば。門の渡の異なれば。
敵勢三百五十騎。七分の分をば此処彼処の。諸りぐの寄の合せ。狼狽まどる城兵

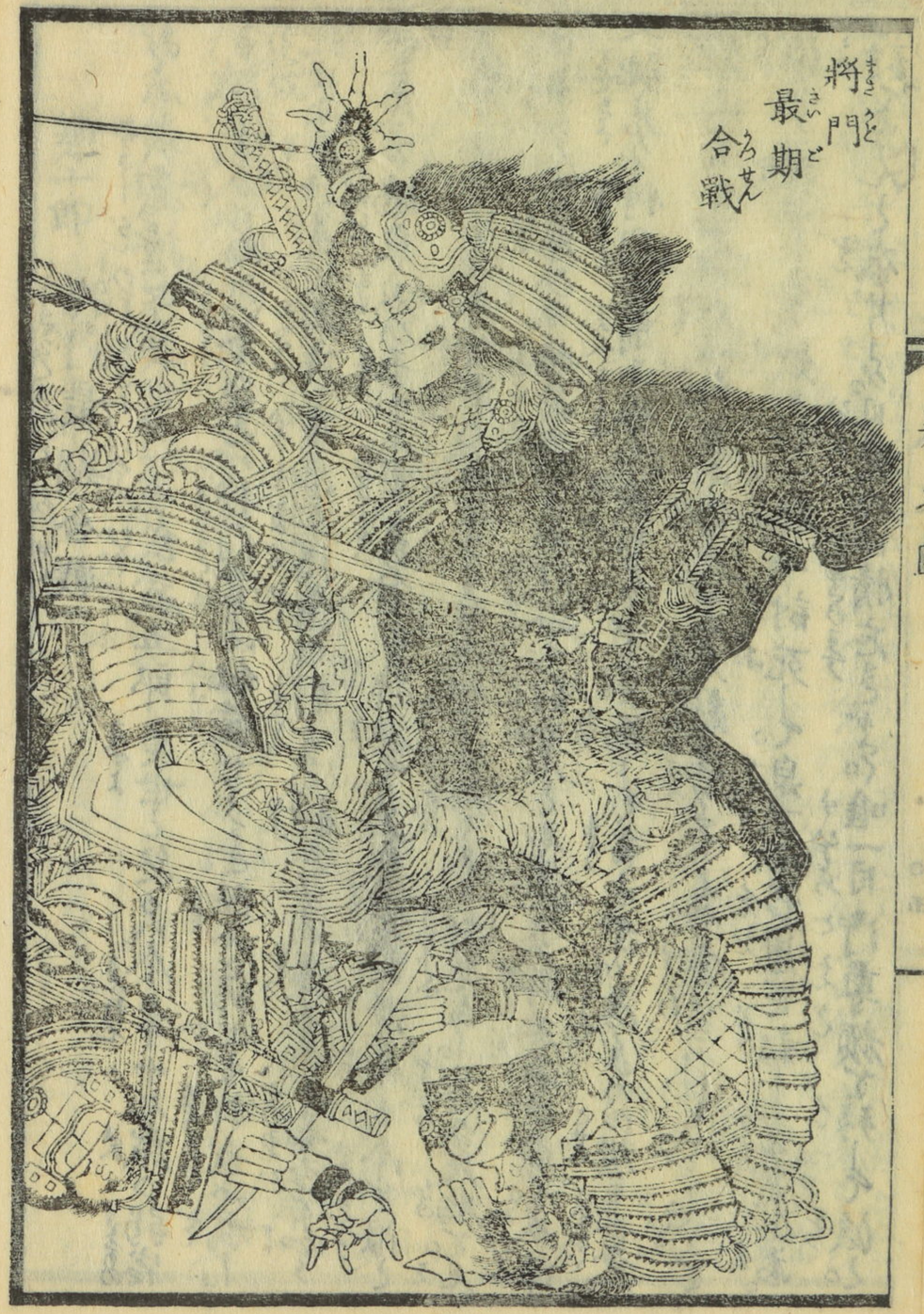
共を。雑伏切伏せ狂ひ廻り。遂もあ〳〵せば責立まば敵の多かも寄うの〳〵。途
方に暮て。矢も打捨。とと先ゆと落ぬ。将門宗徒の者を集め。三百騎人
大力義力の。鋒を義疲討の兵共人とも。さて大敵多くの〳〵。一人で撰討ふする
者も多きるの多。と吸ひ〳〵防ぎ戦ふ。さて〳〵ども猛火織ゆ〳〵。是程り眼張
塞ぬ見非ず。将門主従の。東の尾より落ぬけり。諸方の寄手の時ふ追撃事
多くの将門。終ふ討ぬ。夕の敵軍ふ敗て。
聚まりて。を空ゝして。捷へう。諸も将門の廣嶋山を落。華嶋ふ屯城
張と関を〳〵。折。敗軍の士卒逃て。
臆病神の醒ぬ先ふ寄よして。良成盛秀
鴻を向て。けるの将門の軍兵共。今は世間も新よと思ひ吾ゆく陣を抜
て。軍を脱らて伏せ降人ふ出けるの。安房上総の兵二千餘騎。下野の兵

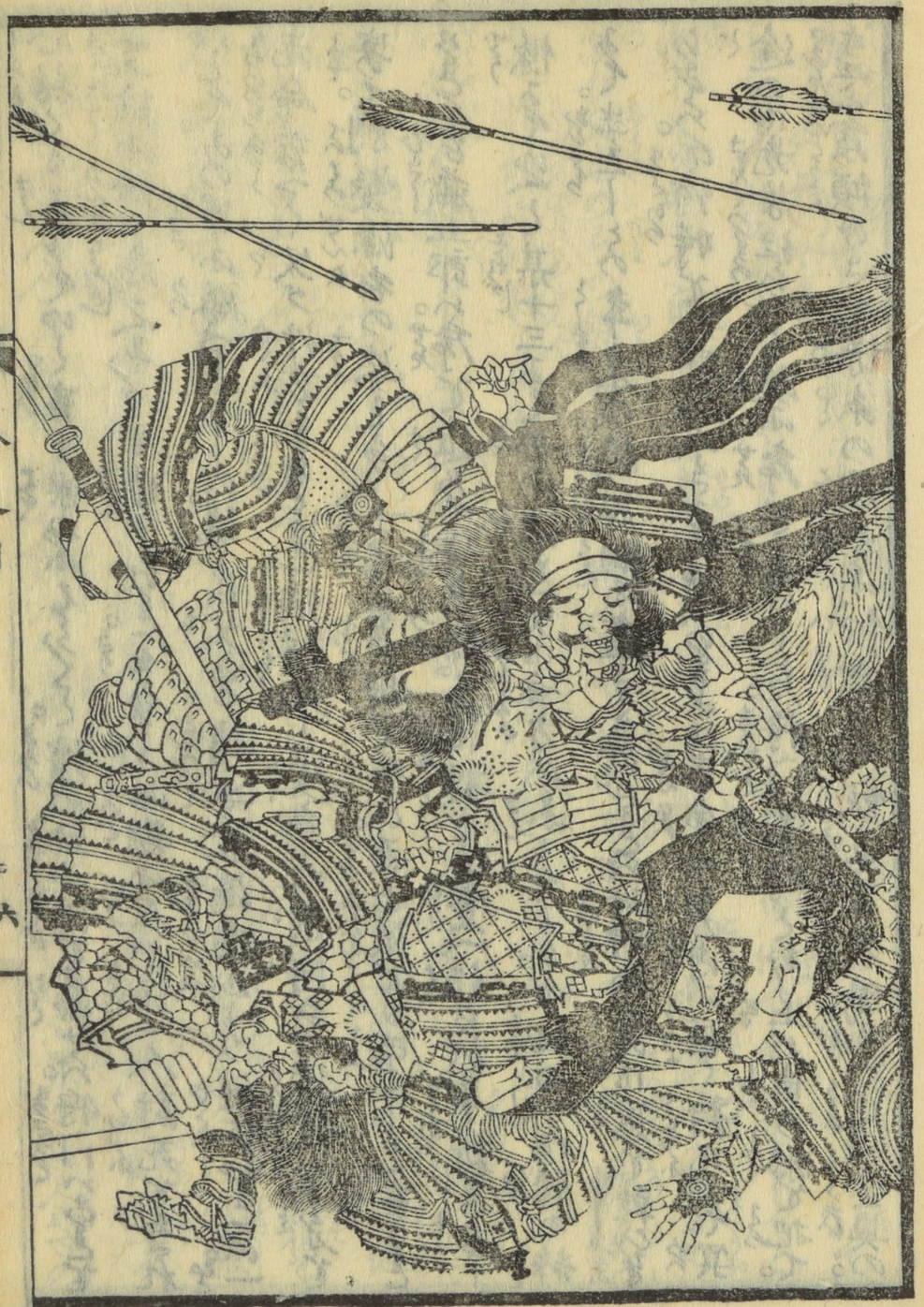
五百餘騎千葉印幡豊田香取臼井佐倉東條南條。その外の者先を爭ひ貞盛秀郷の陣に馳加りる。諸有にあれバその軍勢七万五千餘騎と成て雲霞の如くうち囲ミ時を作て押寄る。將門ハ日来より。情を切る軍兵ども怨嗟に敵とあつく。残り止まる勢ハそれ一万騎中も足ざりけり。さりとて兵どもハこれ業自。今日皆命を捨るる。者共あれバ一同に討死と覺悟を究め。かく大勢の敵を引うけ。聊驚く氣色もなく。整々として控へたり。猪も諸方の手分を定め午の刻より矢合して大を揚ぐ一同に鯨波を作り楯を敲き。馬煙天を覆ひ矢叫びの音天地を響もかくて六所將武ハ北にせ西より。貞盛の勢大勝ハ。今朝逢人に出る者なれバ多猛き軍して面目に備んと真先に進んで戰ふありさま何とも聞ゆらとも見えざりけり

第十四 武藏五郎貞世討死

附 將門最期合戰

去る武藏權守興世が一子武藏五郎貞世といふハ。今年十九歳の弱冠なれども父にハ劣らぬ剛勇なれバ將門常に秘藏せられ既にその日も將武に屬し北にハ在けるが。父興世ハ廣瀬山浪藻の刺より討とられしと落きて安否を知らずと云で。端なく思ひ居しに軍兵のやうを熟視てかくや當家の運命も今を限と見ゆるなり。いかで大將軍の在するうちに討て出死なく討死なし。二心なき胸を見せまゐらせんと思ひ。物具爽やかに打扮て討出んとせしが。聊思ふ事ありて本陣へ馳参り。將門の前に畏り。涙をはらはらと流して申やう。我身の此戰も大要ハ。敵にあらずといへども。今ハ天運に見放されども。大敵遠ざつても當家の運命も今を限りと存ずるなり。然れバ一戰に討死して泉下に君恩を報じまゐらせん爲。先ずて歸らんと存ぜしが。日来の御情忘がたく。唯一目御尊顔を拜して後と


将門と最期合戰



心弱くも泣ども、ゆし言も果ぬにさめざめと涙の袖に涸を流せバ、将門ハおもてを
笑。職に汝が志ハあつくも嬉しけれど、今がら此期に及び汝一人討死をなされ
バとても此軍に勝べきにもあらバ。殊に父なる権守も鴻鹿山より他方を定めバ一
先命存へて父が他方も尋よかし。偽討死と告なバ奈何なる禅院へも身を
よせ。はやく剃髪染衣の姿となり、亡父が菩提を弔ひ吾亡後をも弔りくと言されど
武蔵五郎ハ席を進めて守り諫、是ハ諚とも覚へ侍らバ、卑しき身
條なれど某十三才にて母に後れ、父の味方に来りてより此袖の下此膝の許
にて生立し、その年来の鴻恩洞に尽されバ、されバ此時にその恩を報ひまつ
らずバ何時かは報ずべきにて侯ぞ。いまぞ此存命のその内に疾く討死して冥
途の先光を仕らんと、既に席を立けるを、将門云時とし止め自ら盃を把て
盞に度傾けさせ、赤糸の腹巻に秘蔵して飼立たる宿鴇毛の馬に金具の

鞍置てぞ引せける。貞世ありがたく賜て泣く貴に向ひけるを、将門は遥に視て
とまれぞ今生の暇乞をとさしのみ極き心なき。忽ち鞍に飛乗りて涸をたちまちと
返しなり。かくて貞世ハ元の貴に立帰り、今賜りたる腹巻着て件の馬に打
乗り白木の弓の鉾鎗あるを中間に持せ鏃と早すべ着ぞ一枚楯の蔭より
なて、指詰引詰散々に射ければ、矢ハ走る敵の胸板、兜の一節ものかりけるを
諸矢揃も射ぬともされバ向望の甲の緒てしめ、馬引よせてゆらりと打乗陣所へ
進を出て昨日まで宿を並べ傍輩の事ひとまとど恩を友き義を忘て怨地
敵となりしにバ、今存命のうへ何とて。我等も亦々累の恩なれども遠く先祖を
なれバ不比等の三男、房前公より九世の孫武蔵権守藤原興世が一子武蔵
五郎貞世生年十九歳、泉下の武恩を報ぜんための陣頭して討死する
ぞ。是と思ん人々ハ我首捕て勲功の賞にあづかれとて、いひも果ず二人さすの

大きかを真甲ふさ〜醫〜。家の子郎等二十餘人赤浪ふ進ませひつくと。
三千餘騎あそ囲ざる。兵中へ割て入堂さる横さる薙ぎ立べふ数多まども必
死を究り。その鋒ふ當りぐる。向き靡て中ふ取籠。さ遠矢ぐそ射ける。
負世緒と見へ且べ郎従あらぐく討死して。其身一人とあり〜しべ入りの見えぞ。
尚もあれ敵と引組で差違へて死んめと四方をえまり〜馳廻るふ十方より
雨の如く。遠間もあく射かける矢襠ふ立所二十六箭。鎧もの如くふ折をされ
べ心斗りハ勇むとも。既ふ心神悩乱し。太刀を倒ふ寄ぎく立ぐくふ滅て死
でぞり。利根平八忠り寄て頸て貰てぞ捨ふける。かくてその死骸を見ふ一首
の辞世を書ぎさう

敵とあど敵と共ぐ思ひん者ぐ情ぐ残ぐ〜
と心中の慈緒を滅て。遺の引合ふ納めり。織ふ難〜き心操勝ぐ勇士

ありけやと。第人涙を落〜けを。将頼いとの在さる由ふ而さまを。その夜の物二千餘
騎。鎧を重べて切ぐ出べ。負盛も陣を進め。挑を戦ふる半時。味方の大勢
討ぐさと。或い降人ふ出て相殘る兵五百騎ぐ立べ一所ふ圓めて戦ひ
うど。進も遁ぎは運命ぐふ。雑人ぐうのふ多ふ殺り。討ぎんぐそ打捕ぎと。
馬廻りの勢十三騎。笠符をかなぐ捨敵の勢ふ打交ぐ。廻りかくしめる漳ふ
囲ぎを衝と抜出て。山田の畔の陰ふ至り。心静ふ腹ぐき切て失ぐうけり。爰ふ相馬
の滝を固めぐし。文屋好兼を平次蒙ぐと對陣〜く。防ぎ戦ひぐう〜所ふ
好兼が軍勢防ぎ〜て。滝ふ此ぐより彼ぎ渡りけれべ。緒盛勝ふ乗て貰入。新内
程ふ火をそぐと折り〜。豪の湊ぐり。涙風引巻く吹ぐそ。八方ふ散敗られべ。二十
除所ぐ其間ふ。二十餘箇所。微ぐり。眞柏天を進〜。德大寺西ふ馳ぐり。鎧べ
金銀を鏤め。珠玉を飾り。宮殿樓閣ぐ一元の。炬ぐのぐく立昇ぐ。後宮の

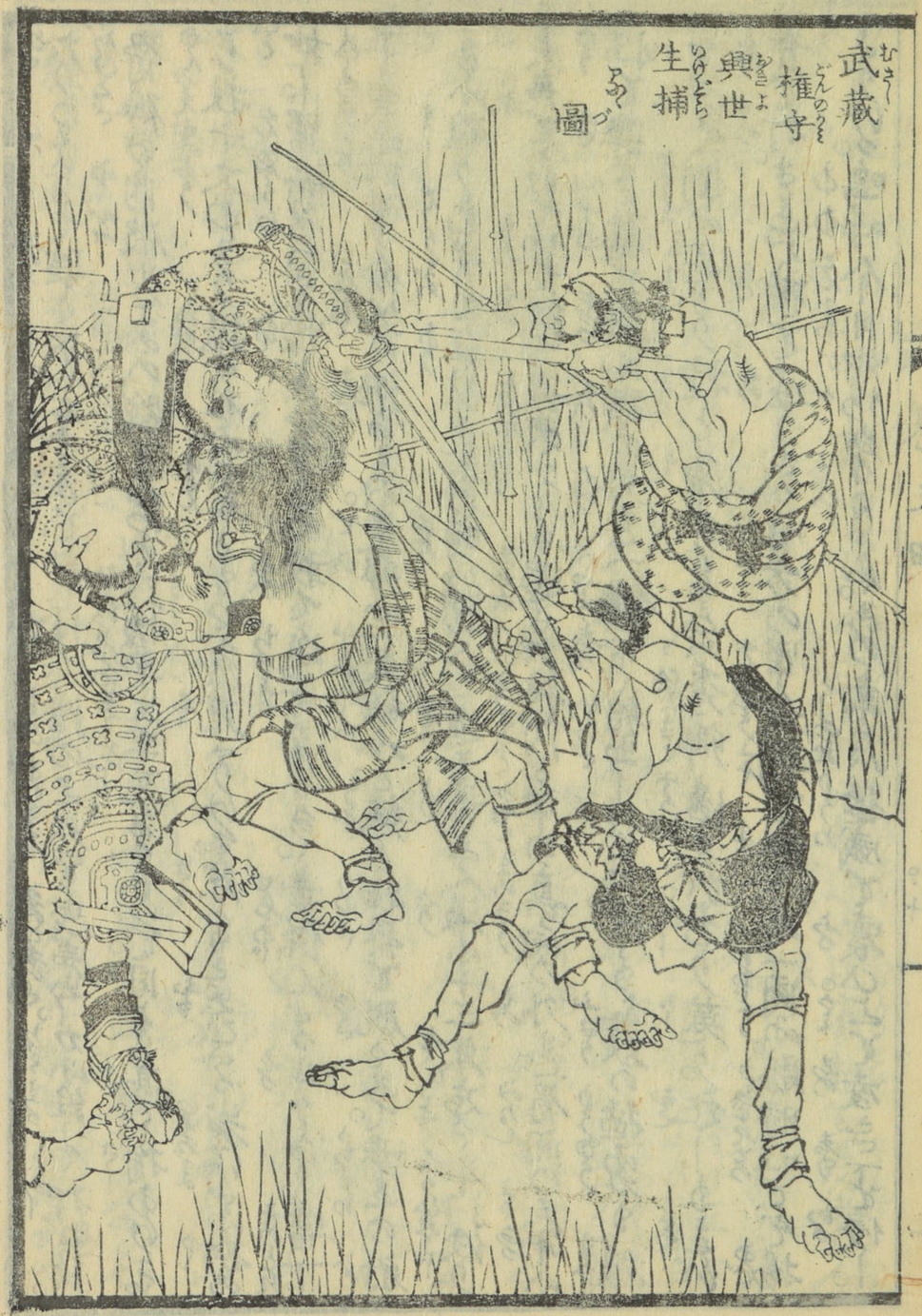
男女数千人猛火を避んとして走り出れバ。寄手の軍勢が途に待受るを逃んと
するバ烟に咽び或ひハ半身焼爛れて喚き叫ぶその声ハさながら叫喚大叫喚焦
熱の苦しみも尚深く増りて凄まじく。斯て将門ハ尚本陣を固めて在けるが其処の
経明主従十八騎閑々と馬を打せ将門が前へ来り。偖も諸方の軍破れ其
が囲める櫓も破られ討残されたる兵百五十騎因京の千時が七千余騎
に渡り合。変時戦て味方を見れバ十七騎こそ残りたれ鉄ども皆討死して武
恩て籤ト奉らんと囲み破り遁れ来りてハ最早諸方の責にも悉く破れたへ。
武運も是までと存ずれバ。敵の追付まうさぬ間にはや自害せられ候へ。経明も先仕ん
と言も終らず濯腕捨腹十文字に掻切てその忍び将門が前にぞ伏
よりける。是を見て十七騎の郎等思ひ〳〵に腹掻切。あるひハ差違死よりける。将門を
とまで恨めし経ある者の在さぬ事。敵を数多切て落しよれ敵と差違へてく。

死生の素因も窮へきかな。独死ぬやうやわらで最期の一軍なして敵の奴原に目を
覚させんと物の具固めて旗出せ兵捌従ふ兵ハ百余騎今を最期と知るごとく。
貞盛秀郷の大勢と万余騎の援合なる莬なすハ大将ぞ討とれと。呼と
喚て走りかまハ将門が勢ハ魚鱗に連なれ。鶴翼に囲て挑み戦ふ威勢奮猛
そうく持立とも是でも隙せバ責闘戦なくて数刻の戦ひに流紅悉く討るさま。
将門一人にぞなりにける。元来将門軍に出る毎に我に均しき兵六騎あり胡禄に
ぞありける一様に出立せ何れを何れと見分がたし。されバ七騎武者と称へて進
退一変に徹しけるが。その兵も今討れて実の将門一騎となる。猶も陣中で覚
悟して魔王を焼律羅立れバ或ハ胴切車切唐竹割にあるもあつて瞬間に十七
八騎矢庭に切て落しけれバ今ハ寄合せんともの無く。八方をさして矢を放
て作つく射かけたり。されども其身金鉄にや又猿の迷や善りけん嚢く矢とれハ

ありし程に将門獅子の怒りをなして。縦横に駈通り。近寄敵を差揚て人礫に打程に一度に五人十人討れ。手に當りて馬より鮮血を吐て死するもありけるに奥州の住人にて岩沼八郎敦直は六十人が膂力ありて坂東一の相撲の上手。殊に兵法の達者なれば我組留て軍功を彰さんと。馳よせて馬を並せその丈六尺有餘にて鬼髭左右に逆立眼は明星の輝く如く。實に一人當千の兵とはいふべきにやいひつべくんとひとし特にも覺へけるが。将門は是を見て額に浅手負たる小冠者に五十人来るとも。何程の事かあらん。去ながら眼前に味方の死亡を見るも口惜く我に組んとする氣遣の弱者どもは多くは有まじ。ふなんには不便なり。疾く帰れ。命を全して早くと受儲き敵の慮外なるぞ吾が逆の程を見よやと叫べば小冠者を組て将門からからと冷笑ひ難で大に寄懸の勇を以てぞ左程まで死を望に従して果んぞと言ふ岩沼八郎が左右の腕を一所に取て。

ひきれりのみ中て聴く撰へ身をさし伸て鐙の上に踏て力の限に押へ骨砕け肉破と彼の腕をぞ引援半生半死なるを目より高く指あげつゝ。投十丈あまり投られしが二言ともいはず死しけるを悲と思ひける岩沼が郎党あ如し。軍兵等ハ是を見て恐怖をさまし敢て近寄ものもなく。責棟んずる斗の有さま。當下平貞盛ハ我が父の仇なれバ是非に一矢狙んと鞍を物具を脱すてゝ歩立の射手に雑りて窺いけるが。あの時将門は遠く遊りて寄けるに。其間に十三束をよく引絞り。大声をかけて切て放つ。其矢少しも過ずして将門が真向の外を眉間の真中に搦て弾き離て頭の外まで一鐵の如く射抜けれバさしもの猛勇も。眼くらみて倒に馬より撞と落けれバ秀郷進寄て起しも立ず首を打て。味方の軍兵は楯を叩き一同に勝時吐とぞ揚ける。嗚呼今日如何なる日ぞや。去年の年月積威を震ひ上て虎ぎ下を侵し。

庚申寺


武蔵
権守
興世
生捕
図

大逆無道の驕を究め栄曜業花も殆りしかも。抗弾所時の義と消て忽地滅び失ぬる事。實に天罰とぞ云べし。法増うし事共なり

第十五　将平将為最期

附　諸将上洛恩賞

話説大草原四郎将平は都宮合戦の手痛き敗を負けるより。其痛金ざとべ本陣のもりけるが。将門既に討死し。松田乙夜又とのの郎等ども。とてもの事に。命を捨べ。と取て。命を捨べ。と。将平が脇へ。とよりて。前へぞ落ける。乙夜又刀をもつて。把付て死ける。五郎将為は斯とも知ず。平三兼任が六千餘騎と。鬼合せ自ら敵を切て落ける。土騎陣に。馳ると。八間後ろ。ぱと。近ぬけて。味方をとべ。ぱと。二千騎ばかりなる。

二百騎ばかりとべ。今は斯よと思ふ所に大将将門討死ぬと。陣こぶ呼ける。耳を貫て関ぬるかとぶ。自害せんやと思ひしが。いやく。實否も分らぬに自害せん事兼怨ぬると。把て返し本陣へ来て。見べ。食見将平を始として。一族郎従枕を並べ自害して在けるとべ。偖の虚言あそこ。ありけるぞ。いざ腹切んとする所へ。敵ぬるとて。乱れ入る。将為の大音声に。獨死ぬんは真土の途も。林一郎。心憂く思ふ処ふ。よく通連おとぞ最期の死物狂ひ。と大勢の中を。一上一下と。秘術を尽し。近づく敵を切て落す。こぶ常陸の住人。荒川弥五郎とのの剛の者。遠流見。合せ。と。組。組まて。将為を。捧ひよて。下へ。と。揉合して。猶て。ふ五郎を。組敷て。終ふ首をぞ。掻ける。是を。荒川が。合戦。ふ八郎。舊地の。駿馬。将為が。の。の。草摺。を。上へ。続さ。ふ。こ。力。斗り。指。こ。ける。こ。の。将為。弱。る。所。を。引。仰向て。首を。掻。あ。ふ。於て。宗徒の一類百九十餘人。此処。彼処。或ひ。

或は自害して失けるぞ。其餘の供奉十方へ散て落行けり。終に前後十四日の其間に國中靜謐なりけり。偏に聖運の勝れる所と云つべし。貞盛秀郷が武功なりとて。衆人その績を称しけり。かくて生捕討死の首級二百六十三。相馬の燒跡に竹柴流し。懸並べうけるが。權守興世が首のみ見えざりしかば。奈何にやらんと不審の折ふし。上總の國伊北の郷の百姓等。興世が來死を生ずるを縛りきたり。其大將の実検に備ふる將大に歓びて。彼百姓等に引出物をとらせ。遂て褒賞の仰せあるべしとて返さるとけり。抑權守興世。廣嶋山浪蔦の砌。何方とも知れず沈吟せしが。人々に別れを告げ一人寥々と。彼方此方を瀏覽し。心の程を思ふやう。今は國に歸るとあつて。行方を定めんやうもなし。人のなかをらんよりは自害せばやと覺悟して。既に刀を抜てうけしが。流石猶きは命なれば。まだ且く死を止まり。一先陸の方へ行。あふぎくの方へも。

三悪道と行やらんと思ふ。上總の國伊北に居る人に顔を見せまじと。独り船を掩ひ漕出し。悪びくふ通りを。百姓共見怪しみ。何者なるぞと。咎らるとて通さぬ所と。興世が名を果さんと。人の情はあくまで奇怪なる。

うしとぞひは注を百姓等。家屋敷の何某とや。幸樂彼等ふ者らを。恨て通さぬの時なり。出合くと喚るやどふ。或は湖漁師など。得物をとり捉て。群をなして拍子を叩き。敲き張打倒し。さてこそ此処へ牽うなと。鳴呼悲哉。故汝ふ如なるものは汝ふ帰る。積悪の報ひ必ずべし。斬てあ將は生を命ぞ。興世が首を刎させて。國所ふをらしとよう。梟首の人々を驚嘆しけり。御厨三郎將頼。大葦原四郎將平。五郎將爲。六郎將武。門厩別當多治經明。文屋好茅。藤原玄茂。同玄明。坂上近高。武藏五郎貞世。桑二郎氏敦。大須賀平内時茂。長掖七郎保時。沼庄司光則。同太郎光武。渭田九郎將真。

同忠次真文瑳江人道周監等八所謂家徒の者ゐて。其餘ハ記さ不暇むべ。
盛ひ火ふ焼き者ふ縛び逃遁とろハその数を尋べ。凡そ南北相馬廣瀬
山辛條ゐて命を須ゐ。七千三百餘人とぞ聞えし。去程ふ上平太貞盛田原
藤太秀郷の孫将。天慶三年三月廿五日。都へ岡陣せゝとしける。其ゐ様義ゐ
ゐく。見聞耳目を驚ゐも。然ま共ハ系向川の賞賜道の働ふ輝集ゐて。ゐとを
見物ゐ。先一番ふ上平太貞盛。同舎弟平次繁盛。同平二系任下總介良持。
常陸ふ丞良義。上野介公貞。甲斐前司保盛。平右近將監家氏。村岡五郎
良文を始として。宗徒の一門二千餘騎。都合その勢五万餘騎。二番ふ田原藤
太秀郷。舎弟藤次宗郷。同藤三高郷。同藤四永郷。同藤五兵郷。同藤六
友郷を始め。秀郷の息男四郎太郎千時。同次郎千晴或ハ作春。同三郎千國。同
四郎千種。その外一族郎従五十騎人。都合その勢六万騎。用ゐと行せゐ

事の外緩ふ思ひ敷ゐ。同月廿九日ふ陣時の節。舎弟ゐ多ゐ。ゐ大ゐ
仲平公。右大臣恒佐公を始め。諸軍の公卿陣の座ふ列ゐ。叙位除目あり。藤原
秀郷ふ從四位下を授。武蔵下野両國の守ふ任ず。上平太貞盛ハ伊賀ふ。藤原
從五位下ふ叙し。右馬助ふ任ず。常陸下總二箇國を賜ゐ。平次繁盛ハ上總
守。同系任ハ上野守。その外の人々。忠賞ふ隨ひ次第ふ依て。ゐ箇所十箇所乃
庄園を賜ふ

抜ゐふ平次繁盛上總守。平三系任上野守ふ任ずとあるハ誤ゐ
誤ゐん。上総ハ上野ハ多ゐ。凡そその國及常陸國ハ親王の受
領ゐ。凡人ハその任ゐべ。然まべ親王受領ゐる。凡某大守と
唱ふ。その事職原抄ゐも出ゐ

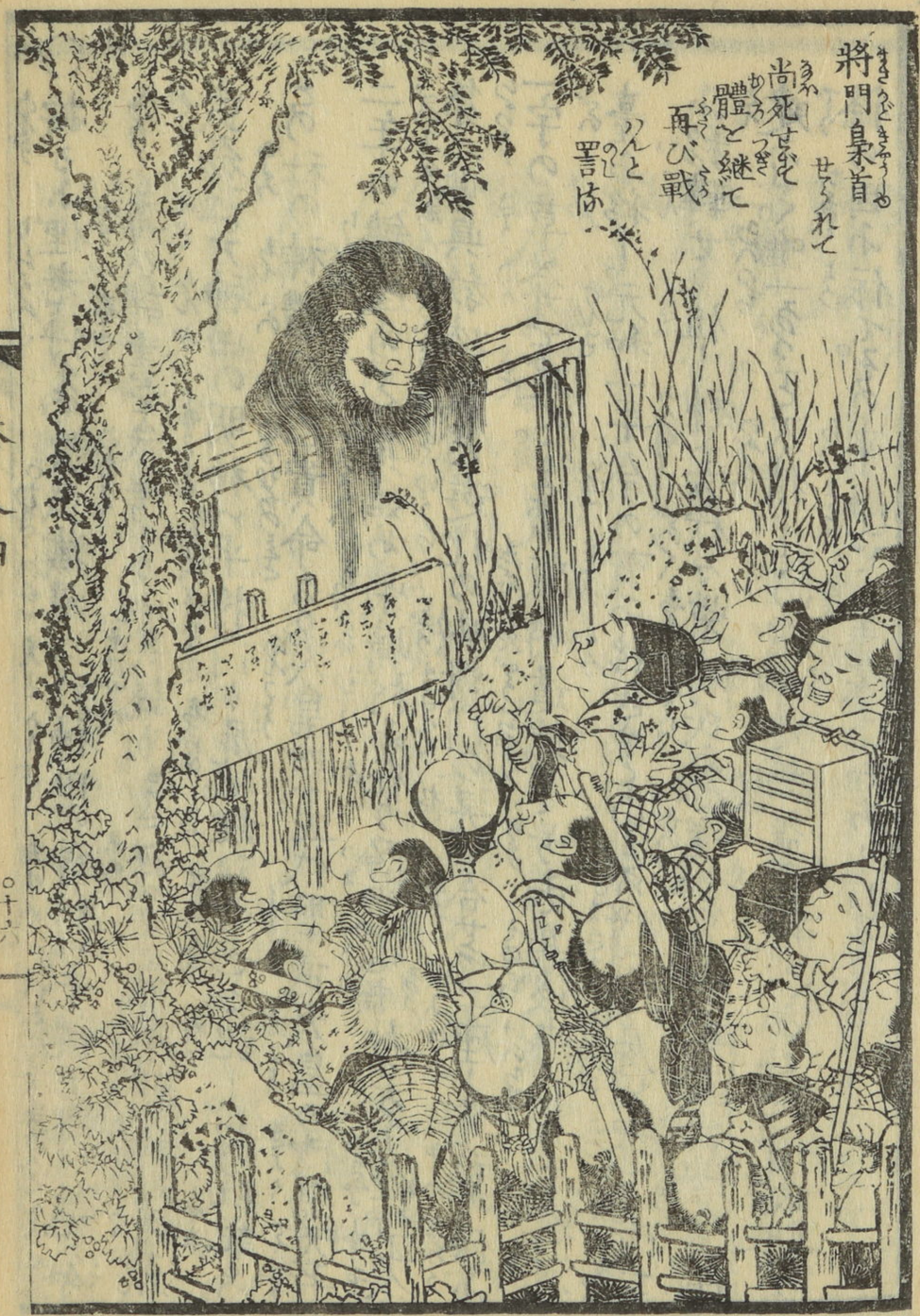
おゐふ貞盛兼平二年の頃。仁和寺ふ詣ゐ。向ゐ。從者数多ゐ。

前駈渡辺競く。その頑猛なるを揮つて出来るものなし。貞盛是を見て。
親王摂家の公達なりやなんと。行旅に潜をけるが。近寄まで来れバ
従者なりける。相馬小次郎将門なれバ。渠ハ執柄家に給仕して。使
の宣旨をも被るなるが。猶有頑猛こそ心を神と思ひや。近付まで会釈して。
過ければ。かゝる者なも渠が体逆意あるに叛ひあし。軍の微なるうち誅戮せずんバ
必ず天下に及ぶべし。寄て殿下へこの事をまをしつれど。既に渠等（貞盛将門を見て親）
なき一族なるにかゝる跡を陵も事。私の宿意あるにとて。竟に許容なりしが
果して新の乱に及ぶ。まくに於て貞盛ハ先見の智よく其機を察
しめたりと世挙て賞けり
按るにこの事国史略にもみえず。されども本文と符すれバ。聊異
聞あるをもて。ここに録して参考に供ふ。聞書に曰 初貞盛嘗詣吏

部王（王名敦実 宇多帝孫 一品式部卿 之子）會将門経過其門従騎甚盛一瞧而入謂王曰賊臣少從者不克殺凶竪遺國家患云云。かくて殿下へこの事をまをしつるを本文の競に差ひ。殿下を
関白忠平公なるべし

第十六 将門首獄門に懸る
附 秀郷日光大明神造立

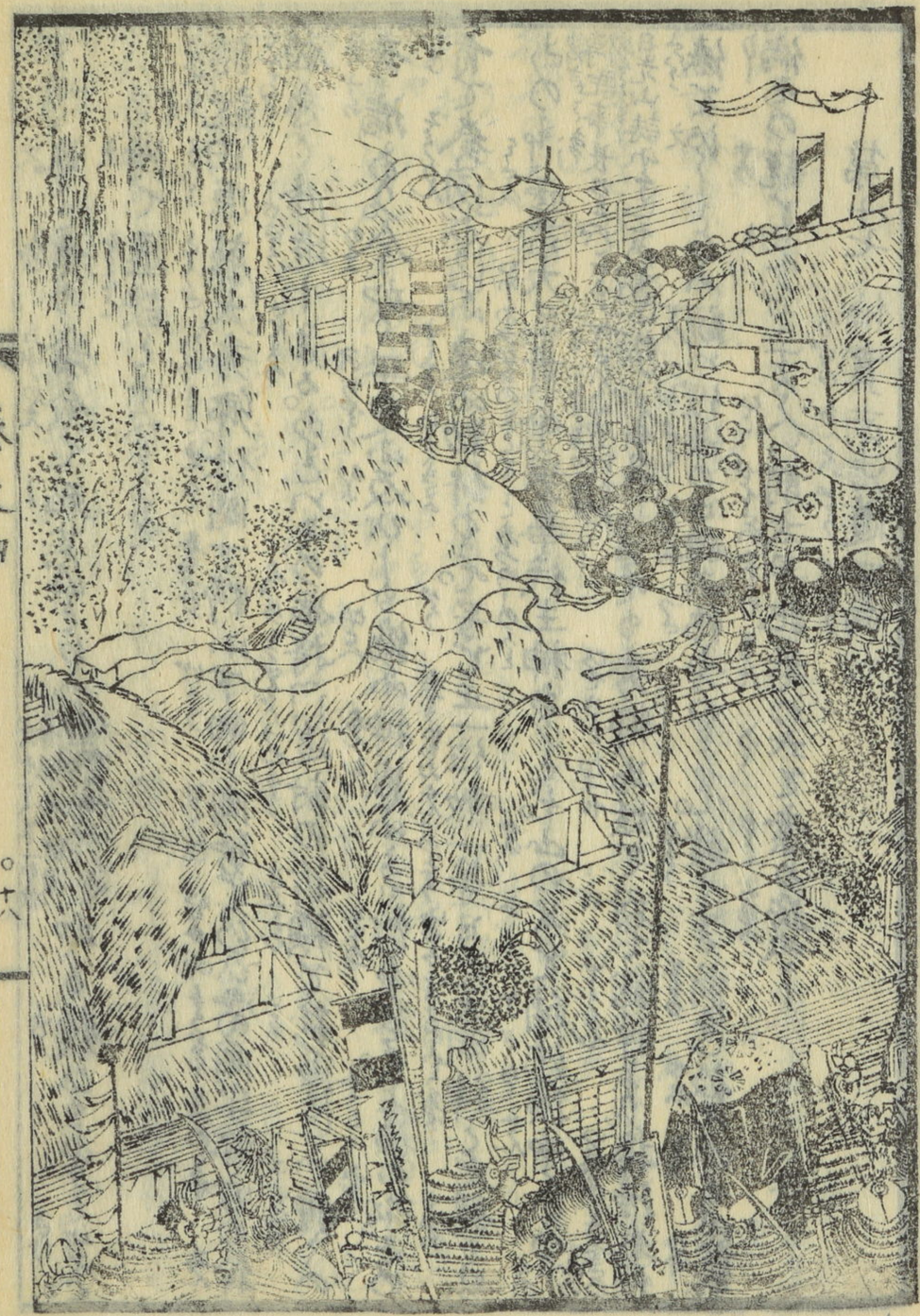
かくて将門が首を検非違使親家。七条河原にて武士より受取。賊主平
将門と標て東洞院の大路を渡し。獄門のたの樗の木にそかけまとけり。洛
中の貴賤是を見んとて群集する事。宛も蟻の途渡るに似たり。嗚呼痛なる
哉。昨日まで八東夷の親王と仰がれ。威勢を東八箇国に震ひしも。今ハ北闕の
逆賊となりて。尸を戦場の巷に曝し。誠を万代に遺をあらし。偏に君臣上下の

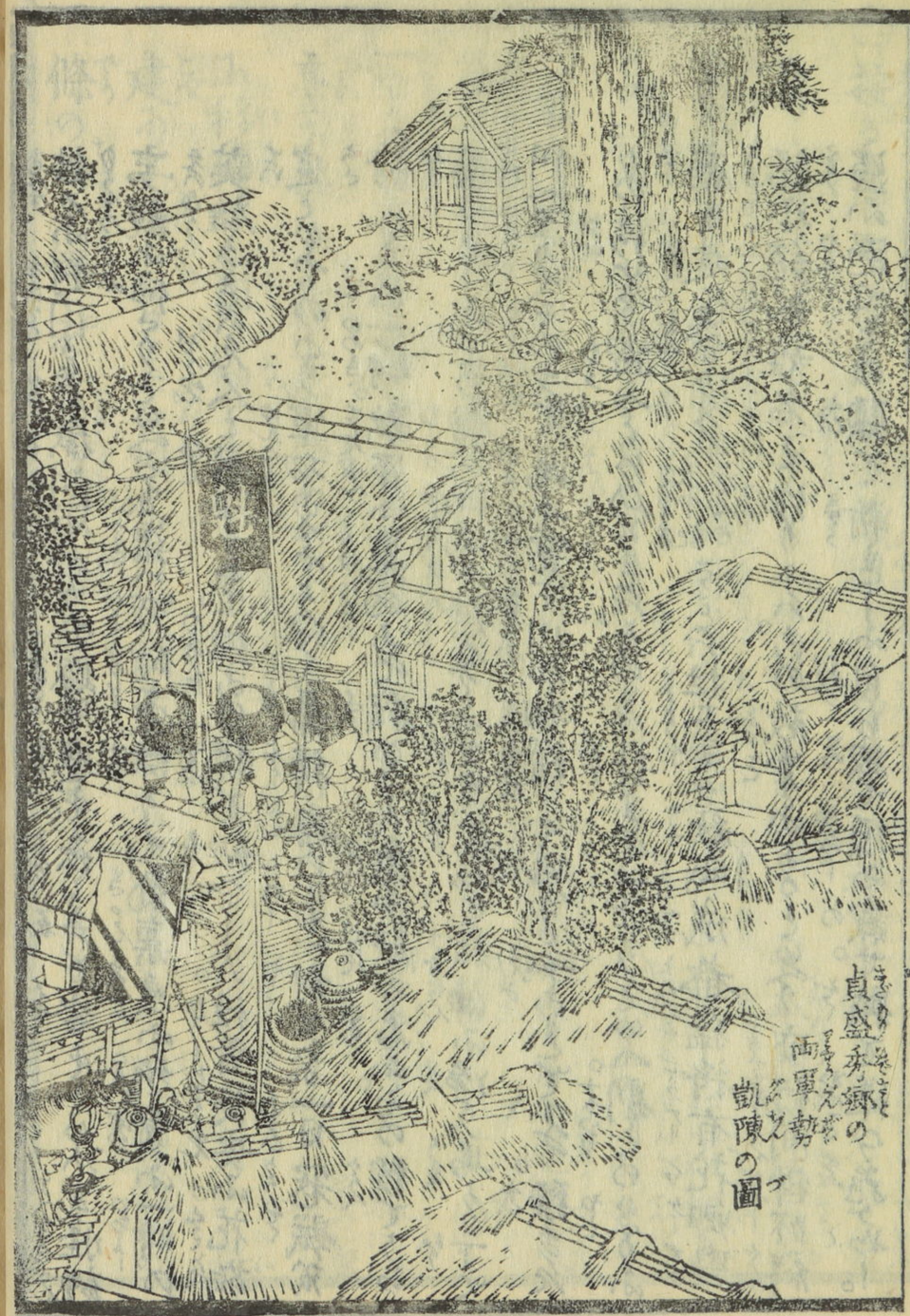


体を分て驕て怒ること。私欲ふ克と雖ざるべし。慎ぞんべきべし。
勇りて猛る時い乱ること。ふしぎも見て誡めの人聖者の金言置あるべし。偖の
将門が首。二月まてその色変ぜず捕ると雖ども如くあて眼を塞ぐべ疑くふあてい
牙て噬で怒とる姿をみるに我體何方ふ有ある。ふ来と二頭徒て今一軍せん
と喚りけるに人耳て駭く。見る人魂て消ぬ。仍者り見て少て
将門い赤かこよりて斬とげる。後者太が様ふく
かくに変こりしこと。その首何ところ所ひ眼を塞ぎ口をや歯を天う海
恵岡の嘆しくやありけ。或人かの首屋空を飛て武蔵国へて有岡の
中へ落けるが。顔こ光り紙放ふ。かる特代の癖者ふとべ偖とふる人祟り
て為ずんと。飛てその所ふ行て逃神と成ひとりふ。さてこそ其魂の怨
消ぬとぞ。異ふる仏祖ふ帰りけ

○按るに俚老傳えたる武藏國江戸神田の神社は平親王將門を祀る所なりと。再び諸書を參考するに其説もまゝ誣べからざゝ本朝神社考に。武刄江戸神田の明神は平將門が屍を埋む所也と記し。かの社記に。この社の神體は大巳貴命なり。人皇四十五代聖武天皇の御宇天平二年の鎮座なり。其始め柴崎村に在り（今の神田橋御門の内なり）あるに遊行上人第二世真教坊東國遊化の砌。將門の靈と合せて二座とし。社の傍に一宇の草庵を建て。是を柴崎道場と号す。其後慶長八年駿河臺に移し。元和二年今の所に移さるとあるに。將門が屍を埋こし所に六に移轉せり。但し神主は代々柴崎氏にて唯一なり。中興真教坊の再建なり。唯一なるを不猜しとなるべし。是無益の辨なるべし。將門最期の條の因に依てその來歷を童蒙に知らしむるのみ。

按るに將門が首獄門にかけて眼を塞ぎ。猶ほ怒る声を發せりとの説。怪誕妄說に似たりとなん。渠は所謂豪傑にて。氣稟衆に超。實に一時の英雄なれば。凡人と異なる。怪異の說を誣べからず。往昔長安に花敬定とゝなのめり。軍功ありしに。嘉祥縣の令に封ぜらる。一日寇賊來て討んと。民一騎。敵軍に見の居たる。その頭ばかり落さるゝ。その體は兩馬に騎て。戈を執ひて我陣に歸り。馬より下て川に至りて。その戈を洗ふ。當下川に物濯して居るが如くなりて。頭の所在なしとのうち盥にとゝのひ。その身は死せりとの説。則その名を問ふに廟を建て祭りあり。天中記杜工南が歌に。成都猛將有花卿學語小兒知姓名と。作りしとの故事なるべし。亦行間錄に。遊に遇てその頭を斬とし。自ら取て頂に載せ騎て迯げ去り。





貞盛秀郷の両軍勢凱陣の圖

豫て首の齋劔て死せじとの（佛祖統紀及僧寶傳に見ゆ）かゝる類ひもありて笑ふ。
浮て虚談とすべからず

話説田原藤太秀郷。任國下野に下向し。國務を行ひ。當國宇都宮の神
殿悉く修造し奉る。あまつさへその頃将門追討の祈願を籠られしに種々の
奇瑞あり。今かく平定に及びしも偏に神恩による所なりとて上派の初。その
旨を奏聞ありしに速かに勅許ありて。号を正一位勲一等日光大明神とぞ賜りける。
この御神霊は大己貴命。男事代主神なりとぞ。山の号を補陀落山といふ（山の寳…）
（傳記事長ければこゝに略す。日光山誌に委し。その書に就て見るべし）されど秀郷蜈蚣を射て龍神より撞鐘巻絹
俵を得しといふ説は。俚俗の口碑に傳ふるのみにて。證とする所なし。故に今之を載ず。
備その說を見んとする人は前太平記巻の六を索め讀べし

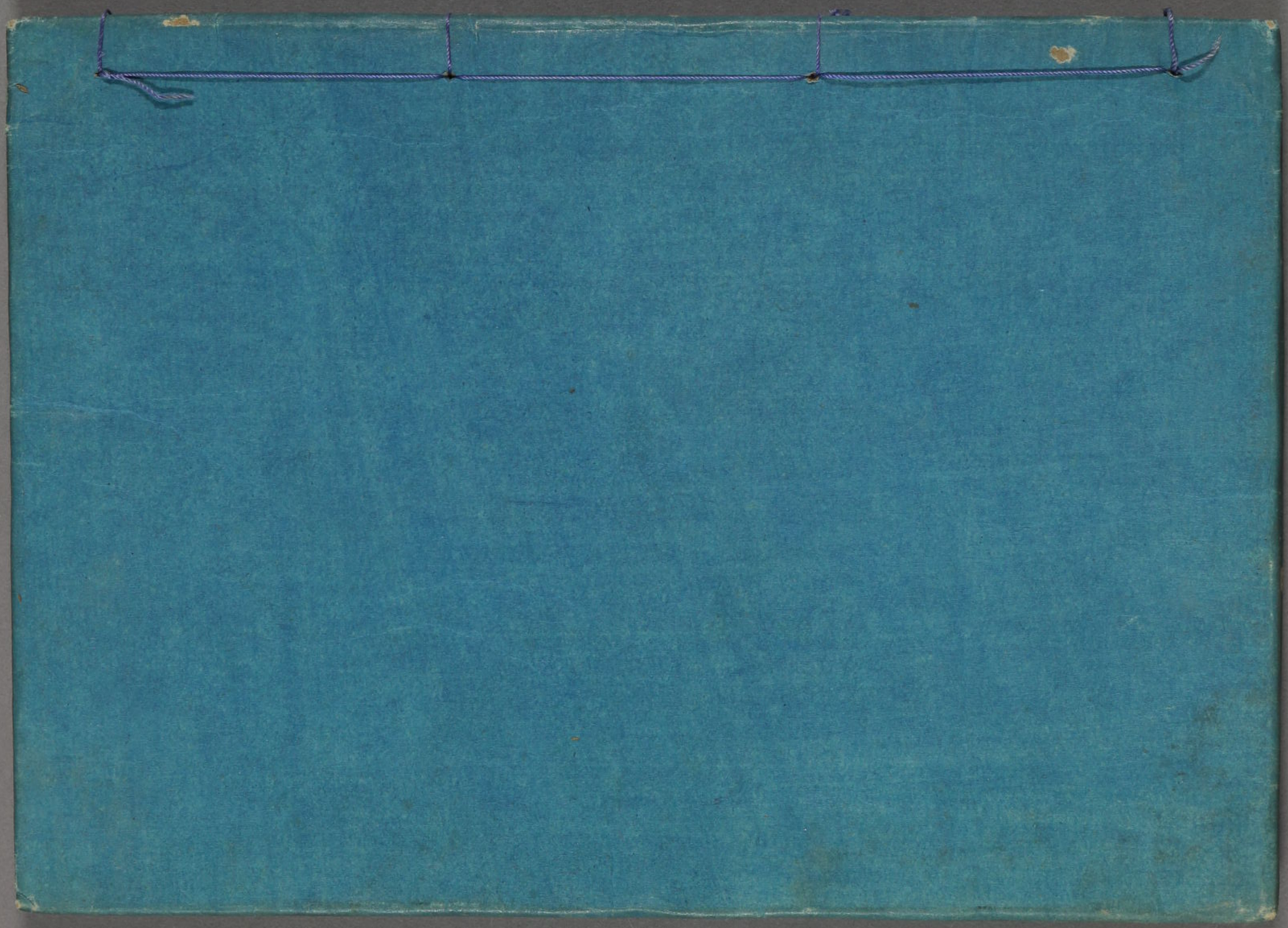
第十七　倫實南海道下向

附　備前の國釜嶋合戦

さるほどに左衛門佐藤原倫實は。純友の討手として。同年二月十三日に都を立
て三百餘艘の兵船を仕立。同十九日には備前國釜嶋に着けり。かくて城の
方を見わたせバ。海の面南北十町ばかりに。石垣を以て屏風を立たる如くに疊
揚。その上に櫓を塗。二重に高櫓を構へ。北の方は海の中へ乱杭を数千本を
打て。島の邊を立させじと構へたり。又南の磯に兵船二三百艘を浮めたり。
横矢に射んとの術計なるべし。城中には近國の武士の集りて種々の旗四五百流
立るが。順風に翻りて宛然海を洗ふが如し。大将倫實はこれを見て先づ乱
杭を除くべしと。水練の達者を多く選び海中へ下して一本も残らず抜去らせたり。
すは責かゝれといふ程こそあれ。其勢都て六千餘騎。各々に舟を漕て。
押寄せて一揉にもと責立る。城中よりは楯板を叩いて雨霰と射かけるにぞ。

ろべのとやとまさぎと川倉小彌太閑澄との人数を加へて。兩の如くに射ゆ。是が是が
為めに二十之騎矢庭に其処へ射倒さる。ずゝ一騎でも是なるべし。丹波の住人草田軌
廉。指の間に射られて散とに悪にあらるべし。川倉兵部地獄を半に主從四十騎人
滝て並べ関て関いく蒐立て。面もふらず戰を最盛川倉に射落さるる。淀
類親族馳蒐り。高の敵を討んとて。後きまく貴戰に純友が合勢推亮純素
とを合よう。二百騎を淀へく。とうくと打て出るに和泉紀伊の宿衆純素
ろへ同もろみを。城中へ打入んと暮地に見立に。純素に取て返し。城中へ入ると
支ある午の刻の始より。中の刻のまで。息なる純に貴るゆどふ人馬疲ふ
男是なるべ。宿軍に故にを引く。海上に碇を解ふ。愛に純
友が遠見の兵宵まで。ひさしく勝家寄るの義火祭地獄参として。新もの所へ
是べ純友にとを。必定大将に伺ひ細わるる。宗徒の者く寄とーあるんの者

あと恭喜と。城中歓びありける。ふくに大将倫実に。今日の軍の様を是べ
城一方より責んとせべ。味方討をのこして。勝利の程に覚束と。さるべ藤の船
ゆえ。日を延て八方より攻合せ。不意を討とそ將要なと。其後の暁に六十艘艘
に。清中の岡水湾に清の残りに八潟高松宮室御磯戸に五十艘。三十艘に潜よせ心相
図の火を焚けるに純友にまと是を関ゆ。宿軍に金家義国の軍兵多是べ陸
の敵に馳とと。紅軍に隠れべ舟と舟との軍にせると。推亮純素に児湾の澳
汐通に紅を書。敵の後を遮らんとその便宜を候ひける。倫實に謀の敵に滅く
御討を換。汚ぐりを実是べ左右に寄もせ。さるべとの四五日に。今宵や
敵の寄ると。物具固めて後ーるど。変に
と是より其をの諸軍勢心緩り気怠り。日毎に酒宴と。ーるに。或に遊女と喚
集會て。歌舞飲宴に心を蕩し。軍事に忘るるが如し。倫実是を関澄に。

時分にもてぞ寄あとて。態と船をの舞も続ぞ。寥くと漕寄て間近くあるまゝに
一回に吐と鯨波を揚べ方より太鼓を叩き。旗を敲きて責へかゝれば。純友が勢ハ
思ひも寄ぬ。汚ぐに其変を見あひて。艪一挺に櫂を打て彼よ此よと突けども。
大半素肌なりしに。物具固なる間さへあり。矢に貫れ薙刀に撃られて。導来
波に倫没するもの。その数を計りがたし。熟と見れば寄手の船ハ
漕附ける。幸ひ切てまろぶに。純友が沙通そこの様をうろたへ。術こそ軍
ばりなれ。擢や者どもと下知を傳へ。櫂を操でそのまゝの兵船。二十隻漕出
大海の瀬戸をさし塞ぎ。鯨波をあげうみ。敵さへと責るとゝ。純友が勢を西
吸き叫び戦ひ。官軍さへも騒動するとゝ。和波の敵を汚ぎる。進退
向ひうつぎりなるに。藤戸の波りを廻り。讃岐路をさして落ゆく

平将門退治圖會 四 終